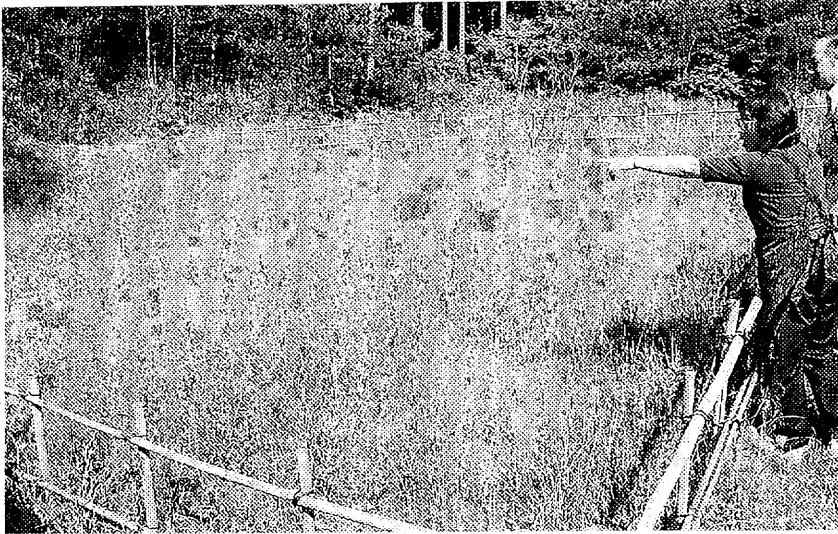


福井



サギ草の保護、増殖活動に取り組みメンバーら(武生市安養寺町で)

「日本の里地里山30」コンテスト

県から武生、さぎ草王国

人々の暮らしに密接なかわりを持つ里地と里山の保全・維持に尽力する団体を募り、特に優れた三十団体を表彰する「日本の里地里山30」コンテスト(読売新聞社主催、環境省共催)で、県内からは激減するサギ草の保護、増殖に地域ぐるみで取り組む武生市安養寺町の「さぎ草王国」代表(64)Ⅱが選ばれた。メンバーらは「地域の自然を見つめ直すこと、住民同士の交流が深まった。受賞を励みに、活動をいつまでも継続したい」と話している。十二日に読売新聞東京本社で表彰式がある。

サギ草は山野の湿地に自生するラン科の多年草で高谷あいに点在していたが、夏にサギの飛周辺部の整備や野草愛好者が採取などで激減。これを

自生地清掃 保護に尽力

12日に表彰式

見かねた五十、六十歳代の住民ら呼びかけて二〇〇〇年一月に結成し、各家庭で株の増殖を始めた。現在、地区の全約百四十戸のうち、約八十五戸、二百人以上が参加。自生地の清掃、保護に保全活動に取り組み、メンバー以外でも八割以上の家庭が、庭先での栽培に協力している。

自生種は花持ちが長く、緑一色の葉は美しいが、品種改良された栽培用の品種に比べ、鉢植えでの栽培は

毎年八月の「サギ草展」では、展示や活動のPRをし、昨年は、県内外から約三千人が訪れた。

昨年は、子ども会や母親クラブと一緒に、地区内の道路沿いにヒマワリやコスモスの種まきをした。今年五月には、地区の子どもたちと「里地探検隊」活動をし、ゲンゴロウや国内最小のハッチョウトンボなども確認した。

代表は「国王」、住民は「国民」、活動費の年会費1000円は「国民税」と呼び、遊び心もある。

永当さんは「今後は、二十、三十歳代の若い世代にもっと参加してもらい、中学校の自然学習の場としても積極的に活用してほしい」と期待している。

難しいという。葉が巻いたり、黒斑が出たり、病気にもなりやすい。毎年三月から、花が終わる、翌年の準備をする十月まで、毎日、水や養分を与え、丹念に育てている。自生地にもほほ毎日、足を運び、観察。